



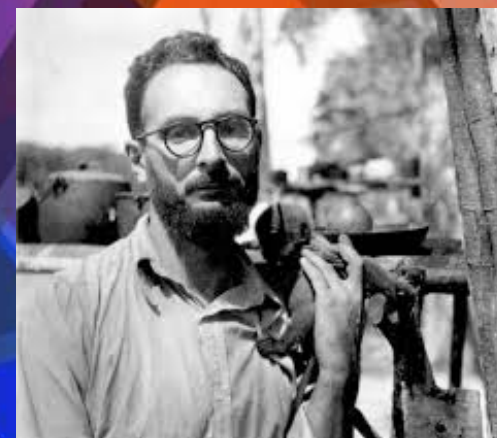
部族民通信Youtube
人類学講座

2025年10月
~2026年7月

クロード・レヴィ・スト
ロース著

野生の思考

La Pensée Sauvage I
具体科学 Science du
Concret



Claude Lévi-Strauss
1909~2009
(Bororo族調査時、1936年)

野生の思考 La Pensée Sauvage
具体科学 Science du Concret

La Pensée Sauvage 野生の思考 別の名「野生の三色すみれ」解説 1

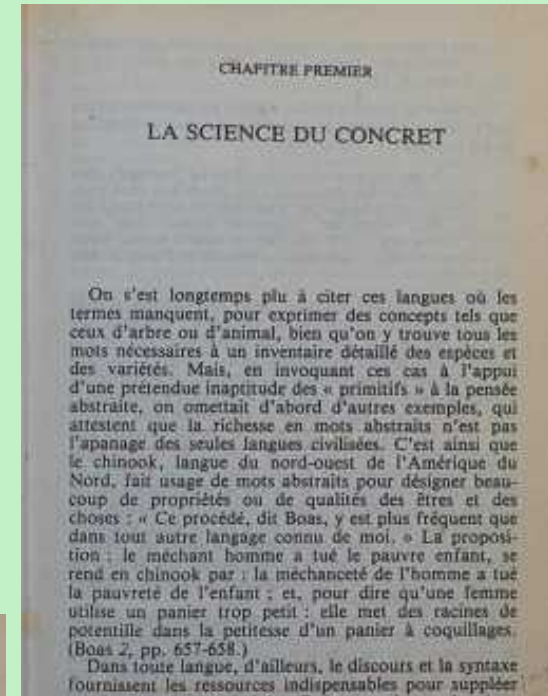
本書紹介は2023年10月に起稿した

25年9月に再解説を試みる理由

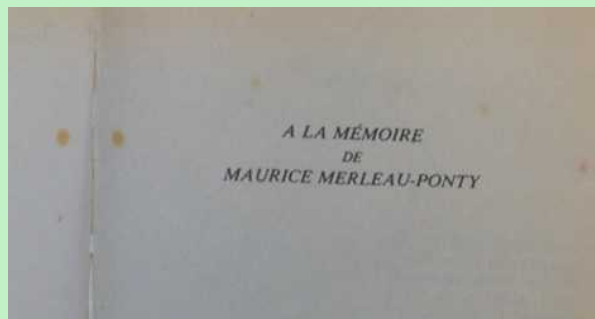
23年版を読み返し捉え方と解釈に浅さが目に付く
新たな解釈を盛り込み、ここに改訂版の発表

野生の思考 La Pensée Sauvage 具体科学 Science du Concret

初版出版1962年Plon社
投稿子の所有はAgora
ポケット版2019年印刷



表紙
中折り (Maurice Merleau-Ponty
に) 中表紙
第一章 Science du Concret 具体科学



未開とされる世界各地の先住民の思考手順を「具体科学 Science du Concret」とする。近代科学とそれを比較し「優劣を基準に」両者を論ずるは誤りと指摘した。その説を展開するために新たな比較手法の用意している。

具体科学の原理；

- 1モノは主体、単属性。モノ自身が判断、行動する
- 2一元因果律（事象、出来事の因果は単性）
- 3世界森羅の一方向性（モノ現象の分類 Classement の特異）
- 4 Langue 言語に於いては個別語彙の充実

現代の思考方法を「近代科学 Sciences Modernes」と規定

a 未開思考と現代のそれは思考を差し向ける方向が異なるだけで、未開人（先住民）は現代人に劣らない理性を発揮し、世界の森羅を解析している

b 未開思考とは人類のそれまでの叡智を、新石器時代に大成した知性。その根底は「モノが主体」で、その思考原理は現代人にも受け継がれている

皆様の理解をより深めるため序文（部族民の独自解釈）を設ける。それを踏まえて主題に分けて解説を試みる。

主題は具体科学、抽象語と具体語、概念分断（意味論）、形態学、Congruence（異種同定）、分類、魔術、トテム分類の論理。

序文；

具体科学を現代科学（Sciences Modernes）と対比させる。
具体科学の始まりを新石器時代に求める。それ以前から人類が積み上げていた叡智を新石器人が承継、新たな知見を加味し大成した。

新石器に先立つ旧石器時代は数十万年（後述）続いた。その重さを加算して、人類の永き理性の歩みの結晶が具体科学であるとする。

« L'homme du néolithique est donc l'héritier d'une longue tradition scientifique » (page 28) 新石器人はかくも永い過去からの科学遺産を継承している。人の思考の根底にその原理（具体科学）は今も宿る。

序文；

具体科学を現代科学（Sciences Modernes）と対比させる。

具体科学の始まりを新石器時代に求める。それ以前から人類が積み上げていた叡智を新石器人が承継、新たな知見を加味し大成した。新石器に先立つ旧石器時代は数十万年（後述）続いた。その重さを加算して、人類の永き理性の歩みの結晶が具体科学であるとする。《 L'homme du néolithique est donc l'héritier d'une longue tradition scientifique 》（page 28）新石器人はかくも永い過去からの科学遺産を継承している。人の思考の根底にその原理（具体科学）は今も宿る。

旧石器の始まりはオールドワン石器をもってする、300万年継続した。よってヒト理性は300万年に重なる層の積み上げであろう。本書の文列を紐解くと「前新石器」思想とは何かに見当はつく。

近代教育を受けた「文明人」にしても、未開とされる具体科学の「旧態」を近代理性の真横に抱えていると判断する。本書に於いてレヴィストロースは幾つかの文節にてこの実例に言及している。

先住民思考を劣性と決めつけ現代人の思考と断絶して説明するは無意味。これが本著の主張となります。

現代科学の定義；

それは「誕生して数世紀しか経過していない」の経緯を説明しているのみ（現代科学は何かをこれ以上は広げていない）。投稿子は「コペルニクスが開きデカルトが裏打ちした科学」と判断する。

具体に対応する言葉は抽象です。現代科学を抽象科学と呼ぶには抵抗を感じる。

「形而上科学」との形容はあり得る。形而上の理由は「見た目で判断しない、モノを支配する何らかの力」がモノの内面、後方に存在する。モノとはその（見えない）力の客体となります。モノが主体の具体科学とは真逆の思考です。

野生の思考 La Pensée Sauvage 具体科学 Science du Concret

現代科学の定義；

それは「誕生して数世紀しか経過していない」の経緯を説明しているのみ（現代科学は何かをこれ以上は広げていない）。投稿子は「コペルニクスが開きデカルトが裏打ちした科学」と判断する。

具体に対応する言葉は抽象です。現代科学を抽象科学と呼ぶには抵抗を感じる。「形而上科学」との形容はあり得る。形而上の理由は「見た目で判断しない、モノを支配する何らかの力」がモノの内面、後方に存在する。モノとはその（見えない）力の客体となります。モノが主体の具体科学とは真逆の思考です。

「見た目」で太陽、惑星は地球を回る。天動説は具体科学の思考方法から抜けだせないから、見た目通りの観察で「天球が回る」にとどまる。それでは惑星の天空一点での停止、それに続く逆行が説明できない。プトレマイオス（古代ギリシャ）は「逆行運動を説明のため、中心からずれた導円と、その導円上を公転する円を導入し…」（Google Ai）複雑化させているだけで、その二重円運動の根拠はどこにも見あたらない。

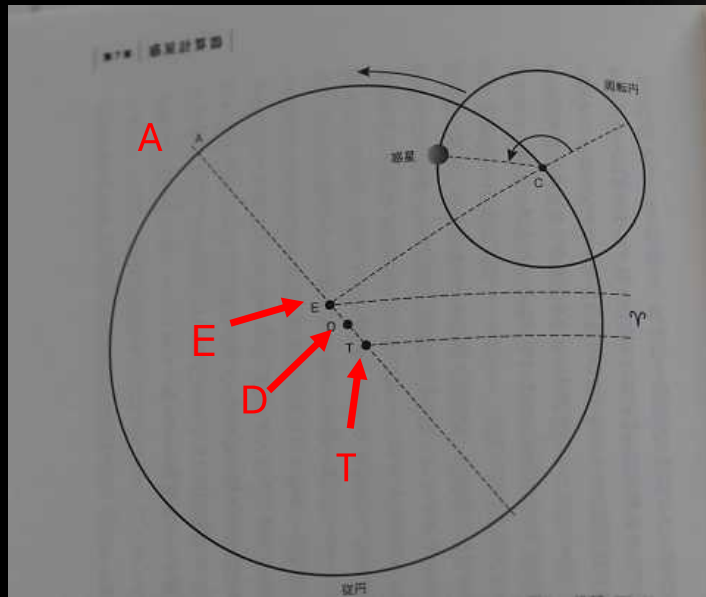
（プトレマイオスの惑星2重回転を次ページにて説明している）

野生の思考 La Pensée Sauvage
具体科学 Science du Concret

(左図) 惑星はA (左上) に向かう。惑星位置はT点 (地球) から遠いので速度 (角度進行) は緩やか。周回円の角度は従円のそれを打ち消す方向に働くから、惑星は動き (角度) をさらに遅くする。A点で惑星は停止する (かに見える)。A点を越すと周回円の角度進行が更に優勢となって、惑星は逆行する。Aの対極点では従円と周回円の速度が相乗するから、惑星運動は速い。

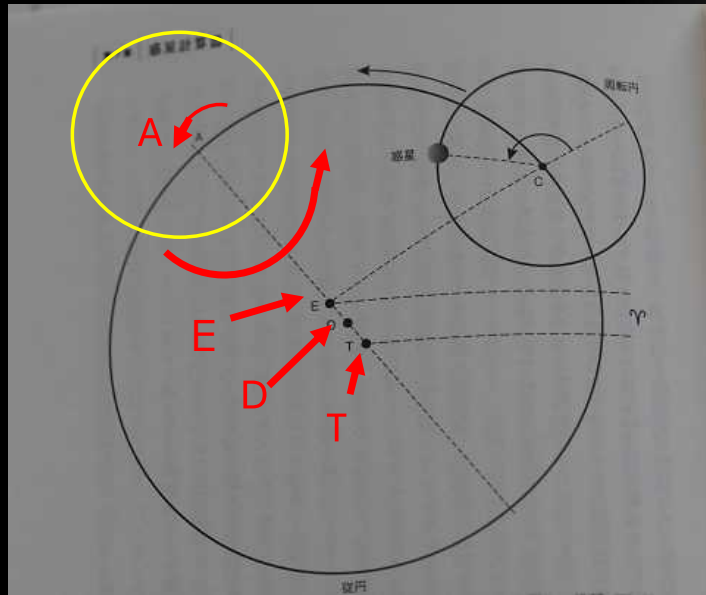
「天球の惑星運動のふらつき。これは二重円の角度進行の相乗、打消という錯覚を我々が見ている」 (プトレマイオス)
彼はE点 (エカント、Equant) を想定する。我々が地球とは中心点を挟み逆の点で、そこでは両円の角度進行が地球とは逆に相乗する。すなわちA点の近辺で従円の角度進行が速く進むに合わせ、周回円の打ち消しが働くから速度は一定。同じ原理でAの対極点では速度の相乗となるから、ここでも一定。

惑星は常に一定の角度進行で運動する、しかしD点 (天球の中心) でもT点でもそのようには観察できない。だからEのエカント点 (平等点) から惑星を見れば「惑星の本来運動、常に一定速度で天球を駆け巡る、これが観察できるのじゃ」と教えた。見た目の宇宙の解説、具体科学原理の頂点といえる。



アストロラーベ (フォーク著松浦訳、柏書房) からデジカメ
著作権は柏書房にあります (使用許可を問い合わせ中、赤字赤線は部族民)

野生の思考 La Pensée Sauvage
具体科学 Science du Concret



アストロラーベ (フォーク著松浦 訳、柏書房) からデジカメ

(左図) 惑星はA (左上) に向かう。惑星位置はTから遠いので速度 (角度進行) は緩やか。周回円の角度は従円のそれを打ち消す方向に働くから、惑星は動き (角度) をさらに遅くする。A点で惑星は停止する (かに見える)。A点を越すと周回円の角度進行が更に優勢となって、惑星は逆行する。Aの対極点では従円と周回円の速度が相乗するから、惑星運動は速い。

「天球の惑星運動のふらつき。これは二重円の角度進行の相乗、打消という錯覚を我々がしている」 (プトレマイオス) 彼はE点 (エカント、Equant) を想定する。我々が地球とは中心点を挟み逆の点で、そこでは両円の角度進行が地球とは逆に相乗する。すなわちA点の近辺で従円の角度進行が速く進むに合わせ、周回円の打ち消しが働くから速度は一定。同じ原理でAの対極点では速度の相乗となるから、ここでも一定。

惑星は常に一定の角度進行で運動する、しかしD点 (天球の中心) でもT点 (地球の宇宙座標) でもそのようには観察できない。だからEのエカント点 (平等点) から「惑星を見れば、惑星の本来運動、常に一定速度で天球を駆け巡る、これが観察できるのじゃ」と教えた。

見た目の宇宙の解説、具体科学原理の頂点といえる。

野生の思考 La Pensée Sauvage
具体科学 Science du Concret

コペルニクスは天球運動の焦点に太陽を置き、水金地火の順に惑星を置く。すると停滞、逆行などの不規則運動を説明できるとした。新たな見えない規律が天球を支配する、これをして現代科学の濫觴とします。この「見えない何か」は後に（140年後）ニュートンによって「万有引力」と解明された。

プトレマイオスの二重円運動、エカント点。これらを否定した。

対する具体科学 Science du Concret : 未開人の科学です。旧石器以来の人類智慧も受け継いだ新石器時代に集成された思考です。モノをそのまま具体的に受け入れる。宇宙森羅を見た目聞いた耳で思考する。モノは「主体」で自己表現がモノの有り様、本質であるとの原理が前提となります。

（Concret具体は哲学用語。La notion s'applique à ce qui est donné dans l'expérience 経験に導かれた概念。Dictionnaire de Philo, Nathan）

野生の思考 La Pensée Sauvage
具体科学 Science du Concret

レヴィストロースはそうしたモノの様を具体とした。例を挙げると「雷」は具体であって己が自律し意思を行動表現する。本邦にあって意思は「怨念」が一般だろう（道真の怨霊が雷に化け復讐）。「対立する村長を誘拐するために魔術師が仕掛けた雷」と南米先住民Nambikwara族が語った（構造人類学から）。

（モノを主体sujetとすると易しく読める。だが本書は具体Concretで通し「主体科学」の語は用いられていない）

具体科学を育んだ新石器時代、どのような仕組みからかくなる智慧の集大成に至ったのか；

« C'est au néolithique que se confirme la maîtrise des grands arts de la civilisation, poterie, tissage, agriculture, et domestication des animaux. Chacune de ces techniques suppose des siècles d'observation active et méthodique, des hypothèses hardies et contrôlées, pour les rejeter ou les avérer au moyen d'expérience inlassablement répétée » (page27)

文明を構成する巨大要素の修得、それはまさに新石器時代に始まった。土器、織布、農業、動物の家畜化。いずれの技術も幾世紀にわたる熱心な観察と、方法の模索。大胆な仮説の囲い込みと追いかかけ。放り出すか実用に持ち込むかは、幾度も弛みない繰り返しを経ての決断だった。

« Pour transformer une herbe folle en plante cultivée, une bête sauvage en animal domestique, faire apparaître chez l'une ou chez l'autre des propriétés alimentaires ou technologique qui, à l'origine, était complètement absente, ou pouvant à peine être soupçonnées » (dito)

貧相な野草から農作種に変える、野生の獣を従順な家畜に育てる、あれもこれも食材に持ち込めるなり、使いこなせるまでには、もともとはそんな可能性など全く浮かべない素材、あるいは微かな可能性を見いだしたところからの出発でした。
(page28)

野生の思考 La Pensée Sauvage
具体科学 Science du Concret

« Pour élaborer, les techniques souvent longues et complexes, permettant de cultiver sans terre ou bien sans eau, de changer des graines ou racines toxiques en aliments, ou bien encore d'utiliser cette toxicité pour la chasse, le rituel, il a fallu, une attitude d'esprit véritablement scientifique, une curiosité assidue et toujours en éveil, un appétit de connaître pour le plaisir de connaître... » (page28)

農耕の品種改良練り上げの長い道のり、豊かな地も水も足らなかったかもしれない。そうした状況で草粒を、ときには有毒の根塊を食料に変えていく。毒は毒で狩りに用いるし儀礼に飲用するなどもあるから、毒材の選択改良も。これらにはまさに科学的精神とつきっきりで好奇を注ぐ欲望に根源がある。

部族民：「熱心な観察と方法の模索。仮説の囲い込み…」が何を表すか。
新石器人は優生改良なる遺伝子知識を持ち合わせない。野生を栽培種家畜に変身させる根拠とは、対象には本来、有益な資質が備わると確信していた。

対象（野生小麦コメ、野牛、野ブタら）の観察から始まる。対象素材のあり得るべき、本来として具有する主体を「あぶり出す」試行であった。

余談：「遺伝に優生劣勢がある」（すなわちモノは遺伝作用の客体）と人類が気づくにはメンデル（1822 ~84現在のチェコ）を待たねばならない。

もう一点；「微かな可能性を見せた à peine être soupçonnées = 前述」の意味するところを旧石器人が草花、動物を見極め、内側の「主体」を突き詰める（あぶり出す = 前述）と読みます。

別の言い方であまたの標体から優等生の候補を分別する。今流「森羅からビックデータ」を取り込み整理した。

野生の思考

La Pensée Sauvage I

具体科学

Science du Concret 了